

博士論文要旨

学位論文題目 日中指示表現の対照—二つの小説の翻訳を材料として—

氏名 王 湘榕

本論文は、日中指示詞の文脈指示用法を中心に取りあげ、論じるものである。全体は7章からなる。

第1章では、本研究の目的、指示用法の分類、本研究の構成を明らかにしている。

第2章では、指示詞の研究について、日本語と中国語のそれぞれの研究を概観するとともに、本研究の立場と方向性を示している。

第3章と第4章は、日中指示詞の対応関係を分析するものである。中国語の“這”系指示詞には、「視点遊離」の機能を持つ“這”と、「中立的な存在の指示」を表す“這”があり、それぞれコ系指示詞とソ系指示詞に対応している。一方、日本語のソ系指示詞には、「遙かな存在の指示」をする「ソ」があるが、こちらは中国語の“那”に対応している。「遙かな存在の指示」以外に、“那”には「視点遊離」の機能及び「観念対象指示」があるが、前者の機能はコ系指示詞で訳され、後者のものはア系指示詞に訳されている。

第5章においては、原文の指示詞が複数の訳本の中に異なる指示詞に訳されている場合を取り上げ、その理由について検討している。“那”系指示詞とコ系指示詞の対応を含む用例には、語り手のいる場所に存在していない指示対象を、まるで語り手のいる場所に存在するかのように述べるというレトリック効果が見られる。これは、中国語では、“這”も“那”もともに「視点遊離」の機能を持つため、「視点遊離」の機能を持つ“那”を日本語に訳す場合には、「観念対象指示」のア系指示詞を使って原文とは異なるニュアンスで訳すか、「視点遊離」の機能を翻訳してコ系指示詞で訳すかという選択を迫られるためと考えられる。“這”系指示詞とソ系指示詞の対応は訳本による差異が生じる理由は、ソ系指示詞と“這”系指示詞の多義性及び指示内容に曖昧性があることに関係があると考えられる。

第6章においては、日本語小説『ノルウェイの森』とその3種の訳本において、ソ系指示詞が各訳本の間で“這”、“那”という2種の指示詞が使用されている用例を“這”に訳されている訳本が多い用例と、“那”に訳されている訳本が多い用例に分け、この2種類の用例に存在する差異を検討している。この2種類の用例を比較した結果、話し手の視点がこの小説の展開における主要な時間軸に沿って述べる場合に、“這”系指示詞に訳されている訳本が多い用例と、“那”系指示詞に訳されている訳本が多い用例が両方見られるが、小説の展開における主要な時間軸から逸脱した文脈の場合、“那”系指示詞に訳されている訳本が多いことが明らかになっている。これは、指示対象が「小説の展開における主要な時間軸に沿って起きる」場合、“這”で指示するが、指示対象が「小説の展開における主要な時間軸から逸脱し、別の時点に起きたこと」の場合、一時的な時間軸で起きたことを指示することになるため、“那”で指示すると考えられる。また、指示対象が現実的なものではなく、非現実的なものである場合と、指示対象に対して否定的な態度をとる場合に、“那”

系指示詞に訳されている訳本が多いということが明らかになっている。このことから、指示対象が現実的なものであるか否か、語り手が指示対象に対して肯定的な態度をとるか否かといった要素も指示詞の選択に影響をもたらしていることが明らかになっている。

第7章では、本論文のまとめと意義、及び残された問題と今後の課題について論じている。